

【書評】

酒井泰弘『ケインズ対フランク・ナイト ——経済学の巨人は「不確実性の時代」をどう捉えたのか』

ミネルヴァ書房, 2015年, 365頁

『リスクの碩学 現代日本と学説史および学究人生に絡め ケインズとナイトをかたる』とでも解題すべき、軽妙・多彩な論説書である。実際、本書に登場し、著者が直に目の当たりにしたと語る人物のなかには、「一般均衡理論の大家」で「大学人から畏敬の念をこめて『不動点教授』(Professor of Fixed Point)と呼ばれていたロチェスター大学の恩師」(201, 202) ライオネル・マッケンジーをはじめ、「御尊顔を遠くからほんの少しだけ拝したことがある」(2) というナイト本人(!) や、「ナイトの残影が色濃く残っていた」(78) という弟子のマーティン・ブロンフェンブレナーなど、錚々たる顔ぶれが含まれ、本書に連なる研究テーマを米国で決断した際にオスカー・モルゲンシュテルンと交わした会話の内容(23) など、驚きの挿話も少なくない。そうした逸話が、第1章『「想定外」を想定する—ケインズ対フランク・ナイト』、第2章「蓋然性論と不確実性論—奇跡の1921年」、第3章「ナイトのトリアーデ—リスク・不確実性・利潤」、第4章「時代の子ケインズと新しいヴィジョン—ナイトへの接近と離反」、第5章「ケインズの新理論—『一般理論』の衝撃」、第6章「市場均衡の美学とナイトの異論—競争の論理と倫理」、第7章『ベルヌーイからケインズ=ナイトまで—原発のリスク経済分析』、第8章「同時代人たちを越えて—不確実性の時代を生きる」のなかに、散り

ばめられているのである。

ただ、このように魅惑的な論題を掲げているために、かえって、タイトルから即座に惹起される興味関心や、ケインズとナイトに固有の問題関心とは必ずしも一致しない議論が散見される、といった印象は拭えない。例えば、数学基礎論や論理学にもつながる哲学史上の新地平さえ切り拓こうとしていたケインズ自身の深い問題意識を尊重すれば、従来『確率論』と訳されてきた *A Treatise on Probability* (1921) を『蓋然性論』と改訳し、ナイトの『リスク・不確実性および利潤』[以下『利潤』と略記] (1921) に接近させようとするのは、やはり無理があるのではあるまいか。また主著の(出版年や表題はともかく)執筆動機が根本的に異なるばかりか、123頁の上手い例えを借りていえば、金メダル級のケインズと、銀ないし銅メダル級のナイトを強引に対峙させるからには、やはり、著者が正しくケインズの「確率革命の経済学」(荒川2002)を再説し、その意義やアニマル・スピリッツの重要性を力説しているのと同様か、もしくはそれ以上に、ナイトの企業家論や利潤論にも肩入れすべきではなかったか。すなわち企業家階層全体——その予備軍と倒産組も含めたアニマル・スピリッツの実践者たち——に帰着する不確定所得としての利潤の平均は、きっとマイナスに違いない(つまり多くは持ち出しや赤字のはずだ)、と主張した

ナイト独自のマイナス利潤論について、わずか3行(94)で済ませるのではなく、もう少し補足解説すべきではなかったか。さらに、『利潤』で既に「時間選好[説]の誤謬」を指摘していたナイトに対し、「依然として古典派の時間選好説に囚われて」(184) いると評したという、ケインズの『雇用・利子および貨幣の一般理論』[以下『一般理論』と略記](1936)での批判(ないし著者による要約)は、必ずしも的を射ていないのではないか、等々の印象が拭き切れないのである。

というのも、第1に、一方のナイトが、現行の資本主義体制では、企業家やその予備軍たちが頼まれもせず、自ら勇んで賭け金を投じて損益を追求し、雇用や生産を高めたりしている側面を重視して、他のどの体制よりもマシな、最悪さが最小の体制だと見ていた点や、名目ないし契約上の貨幣的収益率と、実現ないし実物的な実際の収益率との間の乖離を整理・解消・牽引する力は、基本的には後者の側にある、との理解ないし理論の方に(囚われていたというよりもむしろ)より強く一般性や普遍性、真理性を見出していたと思われる点こそ、ナイトがケインズの「新経済学」を「最悪の経済学」(114)とアメリカ経済学会の会長演説(1950)で批判した、主要な背景だと思われるからである。そして第2に、これらの点はまた、他方のケインズが、本書150-51頁でも引用されている「自由放任の終焉」(1926)において、「現代における最大の経済的邪悪の多くは、リスク、不確実性及び無知から生まれたものである」と語り、「その理由はけだし、境遇か能力に恵まれた特定個人が、不確実性と無知を有利に活用できるからであり、そして同じ理由によって、ビッグ・ビジネスとは、富の著しい不公平を生む宝くじのごとき存在だからであ」って、「これと同様の理由によって、労働者の失業が発生したり、ビジネスの期待が外れたり、能率

や生産の低下がもたらされたりするからである」と述べたうえで、「上記の事柄を救済するためには、まず中央当局による通貨流通や国債発行に対する意識的統制が必要となるだろうし、そして次にはビジネス状況に関する大規模データの収集と伝播(有用な全ビジネス・データの法的全面的開示をも含めて)が必要になるだろう」という(ナイトや制度派らとも通底する)認識を示しながら、(彼らとは異なって)そこからさらに一步を踏み出し、流動性選好説や統計力学的経済観に基づく新たな経済体制論やマクロ経済学へと飛躍することができた、重要な分水嶺であるとも思われるからである。

もっとも、著者が本書で指摘されたように、今まさに二人が文字通り復活してきたとするならば、確かに、その眼前に広がる様々な——以下に列挙する——光景を目の当たりにして初めて、互いに接近を試みる可能性はある。すなわち、新興国や資源国ないし統制経済におけるバブルの崩壊や経済的なアニマル・スピリッツの退潮(および地政学的なそれの伸長)、なかなか成果が見え難くなってきたインフレターゲット政策やゼロないしマイナス金利政策の有り様、国債すらしらリスク・フリーとは言えなくなった金融市場や、契約ないし想定上の貨幣的収益率と実物的な実際の収益率との間の懸隔が顕わになりつつある各種資産市場、低成長の裏返しとも言える内部留保の滞留や自社株買いおよび公的資金による株価の上昇、世界規模のM&Aによる事業再編や租税回避行動、限界生産力説や強運などではとても正当化しえない超高額の経営報酬といったコーポレート・ガバナンスに絡む問題や、政府のかけ声にもかかわらず上昇ペースが鈍いままの名目賃金、そして、『一般理論』の出版前後にも比肩しうる各国の根強い均衡・緊縮財政思想や不穏な政治経済情勢等々を目の当たりにし、恐らく初めて、真

に近接した経済観に到達し、ビッグ・データや経済物理学からの新知見を携えて、双方の側から歩み寄りを見せてくれるのではあるまいか。

と、このように、細かい考証は抜きにして想像の翼を広げ、不遜な雑感を披歴することも許されるような気持ちを湧き立たせてくれるほど、^{アニマル・スピリッツ}血気やげんきに満ち溢れた本書であるが、その背後には、複数の震災や原発事故を経験してきた今日の日本の読者へ向け、「リスクの経済学」に関する一家言を遺しておきたい、という痛切な問題意識がある。また著者みずから「雑学六〇年、経済教育五〇年、リスク研究四〇年」という、「学者

人生の総括」(9)でもある。そればかりか、幼き日に空襲を経験したという重い人生体験も控えている。経済の医師を志した少年がいかに戦後の焼け跡で生育し、アメリカでの勉勵を経て「リスクの専門家」となるに至ったか。主流派経済学の傍らを離れ、再び日本に活躍の場を移した理論経済学者の一つのモデル・ケースとして、興味関心を抱く研究者は勿論、国や時代を跨ぐ経済学の『三四郎』のような物語や、未来への提言、軽妙なナイト論やケインズ論を求める一般読者をも想定に入れながら、囃み応えや後味までもが軽快・甘美であるとは言い難い、独白の書である。

(黒木 亮：獨協大学)